

留学先国名 : フランス

留学先学校名 : パリ政治学院

留学期間 : 平成 26 年 8 月 1 日 ~ 平成 27 年 6 月 30 日

私のフランスへの留学は実に困難の連続であった。しかし、それは同時にそれらの困難をいかにして乗り越えるかを考え、時には友人の力を借りることによって、成長する機会であったため、非常に貴重で有益な経験でもあった。

この報告書の前半では、私が今回の留学で得た成果を現地の学校のエピソードを交え詳述し、それらを今後どのように活かしていくかを簡潔に述べ、また後半ではこれから留学する学生(特にフランス・パリでの留学)に向けて、いくつか主に生活面でのアドバイスを書き記したい。

今回の留学での成果は実に多岐にわたる。私の留学体験を振り返り、どのような力が身についたかという、これまでに経験したことのない想定外の状況に置かれ、それに対し深く考え、苦悩することにより、主体性や忍耐力が身に付き、また言葉やバックグラウンドが違う人々に囲まれ生活することにより、異文化理解(国際性・言語力)、柔軟性が身に付き、それが大きな自信となるとともに、私個人が置かれている状況は国際社会的にどのような場所であるか、日本人としての自分の立場が分かり、自分を見つめ直すいい機会にもなった。

その中でも主体性と忍耐力、そして、異文化理解(国際性・言語力)について、実際にどのような経験を通して身に着けることができたか詳しく述べる。

第一に、私は主体性と忍耐力を主に現地の大学での授業を通して身に着けることができた。派遣先大学で受講した授業のほとんどが 1 セメスターのうちに数回はグループワーク、プレゼンテーションを課していた。私は今回の留学が初めての長期海外生活であり、中学・高校と、ごく普通の公立学校に通っており、当時は語学力に自信が全くなかったため、最初は物怖じしいくつか授業数を減らすことも考えた。しかし、友人達の助けもあり、睡眠時間も削ってこれらの課題のために準備をし、発表時間の何十倍も準備時間に費やした。また時にはスクリプトを用意し、何度も本番への練習を行った。このようなことを繰り返している内に、言語への不安はどこかへ消え、グループ内でのディスカッションでも発言数が多くなり、グループワークも主体的に行うことができた。

第二に、生徒の約半数が留学生という学校の特色もあり異文化理解(国際性・言語力)を身に着けることができた。前述したように授業ではたびたびグループワークが課せられ、そのグループ全員の国籍が違うことは当たり前のような学校であったため、様々なバックグラウンドを持った学生と真剣にディスカッションし、また課外で交流を深めることができた。彼らの発言は私のそれとは大きく違った視点から考えられたものが多く、常に刺激であるとともに、それらを理解しようとするのは時に困難でもあったが楽しくもあった。言語力面では、約一年間という長期の留学ということもあり、留学前と比べると自己表現、またコミュニケーションのツールとして十二分に活用できるレベルまで上がった。現地での授業はほとんどを英語で受講して

いたため、初めはなかなかフランス語を使う機会がなかったが、日仏交流会、またパリ市が提供する移民用の言語クラスにも参加し、次第にフランス人の友達もできはじめ、フランス語での生活にも馴染むことができた。やはり、教科書などでは学ぶことができないが実際にフランス人の間では多用されている語彙・スラングなども多く学ぶことができたことは異文化理解の観点からしても、貴重な経験であった。

私はこれらの留学で得た成果をグローバル人材として、グローバル企業もしくは国際機関など、私の能力が最大限に活かすことができる場所を吟味し、その下で社会に貢献し、地域の成長、ひいては日本のプレゼンス向上に努めていきたいと考えている。

さて、これから留学する学生に向けてのアドバイスだが、私の留学先の大学はその名にもあるように、パリに位置し、今回の留学期間のうちほとんどの時間をパリで過ごしたため、まず専ら、今後パリに留学する予定である学生に向けてアドバイスを書きたい。

留学前からたびたび、日本人がパリに過大な期待を抱くあまり、実際のパリを見て、そこで生活を始めた際に今まで想像していた「パリ」との違いに適応障害（“パリ・シンドローム”と呼ばれる）を起こすことがある。と、噂で聞いていたため、パリの街自体に過度な期待は抱いていなかった、その文化・芸術面はやはり日本では味わうことができず、新鮮であった。これからフランスに留学する方の中ではパリをその賑やかさから敬遠している人もいるかもしれないが、パリには美しい公園、また、静かな美術館が多くあるため、都会の喧騒によるストレスもそこで発散することができる。

また私の派遣先大学では寮が無く、生徒が各自で住居を確保する必要があり、パリの住宅不足問題と相まって、住居を探すのに非常に苦労した。そのため、パリに留学しようと考えている学生で、自分で住居を確保する必要がある方は、半年ほど前から探し始めればある程度、納得がいく住居を見つけることができるだろう。フランスの高校生がバカロレアの結果を得るのが 7 月のため、それよりも前には目星の物件を確保しておきたい。また、インターネットを通じて賃貸契約をした人も幾人かいたが、写真で見た状態と大きく違い、苦情を付けるがまともにとりあってもらえない、ということがあったので、可能であれば自分もしくは友人に頼み、内見することが望ましいだろう。

最後に、これはフランス・パリ以外に留学する人にも言えることであるが、留学での経験は困難の連続であるが、それがより困難であればあるほど、乗り越える価値があり、また後に自信に変わるだろう。これらの困難を積極的に受け入れることが留学を成功させるカギであると私は考えているので、皆さんにもぜひ実践してもらいたい。